

私がなぜ現在の科目を選んだか

「脳神経外科」

信州大学医学部脳神経外科学教室

桑原晴樹

現科を選択した出発点を思い出すと特に感動する実話があったわけではなく、父親が脳神経外科医であることは少なからず影響する。医師になったときは体力と手先の器用さには自信があったので外科系と考えていたが、最終的には親父の助言から同門を叩いたことになる。実際浸かってみると非常に奥が深く、かつ慎重な学問である。要求される技術は幼い自信だけで通用するわけがなく、目標を必要とする継続的な訓練が必要であり、技術が身についたとしても脳の構造とさらに神経解剖を熟知していないと展開ができない。術野は狭く、脳での出血は可能な限り許されないので制限された環境での勝負をかけなければならない。勝負を投げることはできず、そこまで作り上げる忍耐力を磨く必要がある。指導を頂いた多くの先生方にはまだ

まだ及ばないと感じているが鍛錬と学習を重ねることで術者を任せていただく機会が増えた。若手脳外科医の成長としてクリッピング術の完遂が一つの到達点ではないかと考えているが、自分が術者となり無事に手術を終え、元気に退院していく患者を見送るときの達成感は色々な感謝と次につながる自信につながることを感じた。失敗経験が少ない“青い”自分はまだ本当の辛さを理解していないし、後遺症と戦う脳腫瘍や脳卒中の患者を応援することしかできず悔しい場合もあるが、お世話になった方々のおかげで充足感を得ながら脳外科生活を送っている。脳外科に入るきっかけとなった親父の助言は忘れてしまったがこのような魅力の内容ではなかった気がする。そして私より若手の脳外科先生方へ。辛くなった時こそ勉強も大切ですが手を動かすこともお勧めします。特に日々の血管吻合練習を勧めます。技術とともに自分なりの自信が縫い付けられていきます。勝利は努力を愛する、と思いがら私も頑張っています。

(杏林大平25年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「小児科」

信州大学医学部小児医学教室

松岡大輔

小児科医になって腎臓の病気で困っている子たちの力になりたいと思い医学の道に進みました。興味を持ったきっかけは自身がネフローゼ症候群になったことです。小学校卒業式直前、なんか調子悪いな、風邪かな？念のため病院に行っておくくらいで受診したところあれよあれよという間に入院となりました。卒業式にもでられない、大好きなサッカーもできない。入院翌朝、浮腫みで目が開かなかった時に感じた不安・絶望はいまでも忘れられません。その後も何度か再発しましたが、そのたびに落ち込みました。そんな中で支えてくれたのは家族、友人、病院の方々でした。その後、実習や研修医期間にさまざまな科を回り、その科ごとの魅力を感じつつも小児科に決めました。

医師の仕事は病気を治すことではありますが、それだけではありません。治すことができない病気もやまほどありますし、小児では長い年月はかかりますが年齢とともに自然に治っていく病気もあります。病気になったときは大変なこと、辛いことは確かにあります。本人やまわりが心配してあれもこれもやってはいけないのではと自ら道を閉ざしてしまいがちです。しかし、病気が理由でいろいろあきらめてほしくありません。病気とうまく付き合っていけばたいのことはできるから。そして小児科医として内科的な管理で微力ながらサポートできればと思い診療を行っています。

とはいっても、小児科の一番の魅力は月並みですが、子どもたちから元気をもらいやりがいを感じられることではないでしょうか。病棟には元気な声と笑顔であふれています。小児科を選んでよかったと日々感じています。患者さんに寄り添いつつ、医学の進歩にも少しでも貢献できるよう努力していきたいと思えます。

(金沢大平20年卒)